

長野県植物誌改訂 研究史資料 7: 古瀬 義

中村 千賀*

長野県にゆかりのある植物研究者を紹介する連載として、今回は全国をまわり植物を採集した、日本一の、そして日本最後のプラントハンターとも言われる古瀬義氏(写真1)を紹介する。本稿には、神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員の勝山輝男氏と、同博物館学芸部長の田中徳久氏から貴重な原稿をいただいた。また資料の収集には長野県環境保全研究所と大塚孝一氏にご協力いただいた。厚く御礼申し上げる。

古瀬 義(みよし)氏(1911-1996) 略歴

1911年、長野県飯田市に生まれる。1926年、長野県飯田中学校(現長野県飯田高等学校)卒業後、皇室林野局木曽支局に勤務。その後、旧制松本高校、東京慈恵会医科大学予科を中退し、共立女子薬学専門学校で小泉秀雄氏の標本整理を手伝う。終戦後は東京都のバスの運転手を務めながら、全国で植物採集を行う。定年退職後は、八重山諸島を中心に北海道から小笠原まで広く採集する。生涯で15万点以上の標本を作成しているが、その評価は高く、国立科学博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、また海外ではイギリスのキュー植物園、中国科学院植物研究所などに収められている。1996年、死去(84才)。

古瀬義氏は明治44年(1911)、飯田市西部の山村、大平越元に生まれた。13歳から22歳までをおよそ飯田市の風越山の麓の正永寺原ですごしたが、月に数回は風越山に登山し、また標本採集にも何度もでかけたという。長野県飯田中学校時代には、登校前に早朝から登山したこともあったそうである。後年、自身を「風越山人」と称したこともあった。大正15年(1926)に中学校を卒業するが、最終学年である5年生(現在の高等学校2年生に相当)のときに、信州下伊那教育会の標本整理を手伝っていることから、10代のころから植物の分類に精通していたものと思われる。卒業後、木曽郡木曽町の皇室林野局木曽支局に勤務する。その後、旧制松本高校に入学したが一年で退学している。その理由は

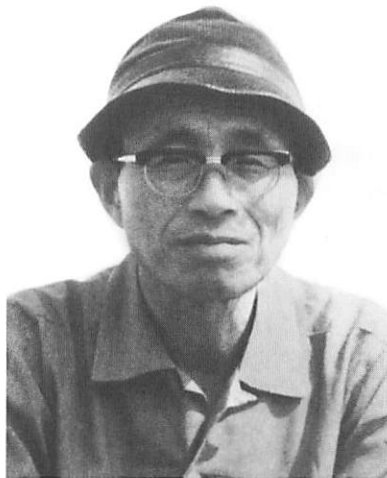


写真 1. 古瀬義氏

「自然科学のとびら」第15巻4号(神奈川県立生命の星・地球博物館)より転載

思想問題だったとされている。

昭和9年(1934)ごろに上京し、共立女子薬学専門学校の助手として、小泉秀雄氏(1885-1945)のもとで植物標本の整理に従事している。古瀬氏が松本高校在学時に小泉氏が同校の講師を務めていたが、あるいはそれ以前から面識があったのかもしれない。その後、外国航路の船員として海外に渡り、ロンドンではキュー植物園に出入りして標本について学んだという。昭和13年(1938)の夏から出征する昭和17年(1942)までは、朝鮮、千島、樺太を歩き、約6、7万点の標本を集めたものの、昭和22年(1947)の飯田大火で被災し、ほとんどを消失してしまったそうである。

戦後は東京都交通局に勤務し、栃木市に居を構え、バスの運転手を務めながら全国で植物採集を行っている。昭和34年(1959)時点で約5万点を集めていたという。長野県内にも繰り返し訪れ、南アルプスの高山帯を含め広く採集している。奥山春季氏(1909-1998)監修の「植物採集ニュース」の中で、東京近傍の採集地として、上田市角間溪谷や川上村梓山などを紹介している。定年退職と同時にライトバンを購入し、夫婦でそれに寝泊まりしながら、北は北海道から南は沖縄県の八重山諸島まで採集してまわっている。さらに小笠原や対馬でも採集している。特に昭和48年(1973)から2年間ほどは石垣島の於茂登(おもと)岳の山麓に住みこみ、植物採集に明け暮れたそうである。

* 長野市立博物館分館 戸隠地質化石博物館
〒381-4104 長野県長野市戸隠栃原 3400

古瀬氏はこのように全国をくまなく歩き、15万点を超える標本を作られた。その作製は非常に丁寧で、植物の採り方、作成方法にもこだわりが強かった。新聞紙に挟んで特別製の平たい石の重しをし、新聞紙を毎日取り換えて乾燥させていた。ちり紙も多用されていたという。またラベルも非常に重視しており、必ず生育環境も書き込んでいた。鹿児島大学の初島住彦氏(1906-2008)は、古瀬氏が作成した沖縄の植物標本の同定をされていたが、古瀬氏の標本について「出来上がった標本は正に芸術作品で、その立派なことは日本一だと思う」と述べている(初島 1996)。

標本は初め、国立科学博物館の大井次三郎氏(1905-1977)のもとに送られていたが、1969年からは大井氏から紹介を受けた、神奈川県立博物館が買い取っている。現在、神奈川県立生命の星・地球の博物館(KPM)では25,000点以上の古瀬標本を所蔵している。他に、国立科学博物館(TNS)、東京大学植物標本室(TI)、京都大学総合博物館(KYO)、鹿児島大学総合研究博物館植物標本室(KAG)、琉球大学資料館(RYU)などで所蔵している。信州大学自然科学館植物標本庫(SHIN)では23点の古瀬標本が確認できる。また国外では、中国科学院植物研究所植物標本館(PE;北京)、スウェーデンの国立自然史博物館(S;ストックホルム)、イギリスのキュー植物園(K;ロンドン)などに収蔵されている。

古瀬氏の植物を見る目は鋭く、古瀬氏が採集した標本が基準標本として扱われている植物が、次の27の分類群で確認されている(田中ら 2014)。原記載時の学名のアルファベット順に以下に示す。なお、採集場所、採集年は標本ラベルに記載の情報を記す。

ケエンコウカエデ *Acer mono* Maxim. form. *piliferum* K.Ogata カエデ科、信濃美和村、1931年。

カブアサツキ *Allium schoenoprasum* L. var. *caespitans* Ohwi ユリ科、下野国栃木市柏倉、1958年。

カイサカネラン *Archineottia japonica* M.Furuse ラン科、甲斐三ツ峠、1948年。

タカネヘビノネゴザ *Athyrium yokoscense* (Franch. & Sav.) Christ var. *alpicola* Hiyama イワデンダ科、羽後島海山、1950年。

ハシナガアワボスゲ(アワボスゲ×ヤワラスゲ) *Carex x furusei* T.Koyama カヤツリグサ科、安房西岬村、1952年。

ケスナヅル *Cassytha filiformis* L. var. *duripraticola*

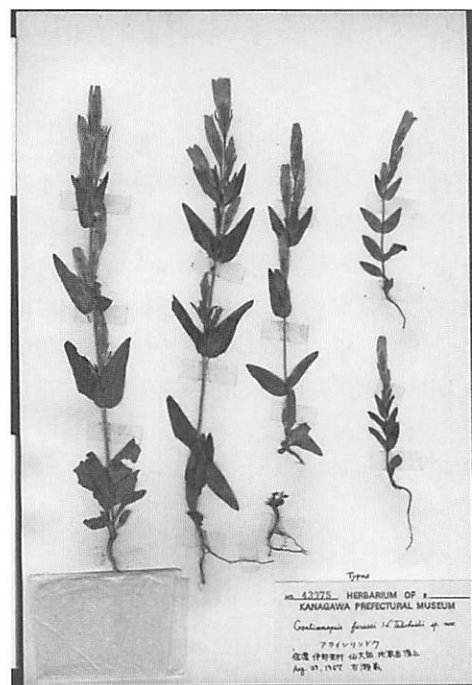


写真2. アカイシンドウのタイプ標本

KPM NA0043075 提供：神奈川県立生命の星・地球博物館

Hatus. クスノキ科、沖縄県石川市石川ダム附近、1972年。

ウラジロカガノアザミ *Cirsium furusei* Kitam. キク科、長野県上松町木曾駒ヶ岳、1934年(1933年か)。

ホウキアザミ *Cirsium graciosum* Kitam キク科、信州下伊那郡大鹿村地獄谷、1931年。

ヒロハナツグミ *Elaeagnus multiflora* Thunb. form. *elliptica* Araki グミ科、下野下都賀郡皆川村、1946年。

シロバナアボイアズマギク *Erigeron thunbergii* A.Gray var. *angustifolius* (Tatew.) H.Hara form. *furusei* Sugim. キク科、北海道日高国アボイ山頂下、1975年。

シモキタイヌノヒゲ *Eriocaulon hondoense* Satake var. *stenopetalum* T.Koyama ホシクサ科、陸奥国下北郡東通村妹沼辺、1954年。

アカイシンドウ *Gentianopsis furusei* Hid.Takah. リンドウ科、信濃伊那里村仙丈岳地藏岳頂上、1967年(写真2)。

ミセバヤベンケイ(ヒダカミセバヤ×ベンケイソウ) *Hylotelephium x furusei* H.Ohba ベンケイソウ科、下野国(栃木県)栃木市皆川城内、1986年。

フルセオトギリ *Hypericum furusei* N.Robson オトギリソウ科、北海道士別市音根別町白山カラ犬牛別、1976年。

ヌボロオトギリ *Hypericum nuporoense* N.Robson オ

トギリソウ科、北海道天塩郡幌延町間寒別ヌポロマポロ沢、1976 年。

ケハイメドハギ *Lespedeza serpens* Nakai form. *hirta* Hiyama マメ科、遠江御前崎、1950 年。

ミカワチャルメルソウ *Mitella furusei* Ohwi ユキノシタ科、南設楽郡作手村岩波、1958 年。

ナミベクリハラン *Neocheropteris ensatus* (Thunb.) Ching form. *undulatodentata* Sugim. ウラボシ科、薩摩国鶴田村鶴田ダム東岸、1975 年。

レブンイワレンゲ *Orostachys furusei* Ohwi ベンケイソウ科、下野皆川村 (栽)、1953 年 (礼文島桃岩辺で 1952 年に採集し、栽培開花)。

フサナリタコノキ *Pandanus furusei* Hatus. タコノキ科、小笠原父島扇浦、1975 年；小笠原父島大村 (栽)、1976 年。

トダイゴヨウマツ *Pinus parviflora* Siebold & Zucc. var. *pentaphylla* (Mayr) A. Henry subvar. *todaiensis* Sugim. マツ科、長野県上伊那郡美和村戸台幕岩、1966 年。

ヤマメザクラ (マメザクラ×ヤマザクラ・ミノブザクラ) *Prunus furuseana* Ohwi バラ科、甲斐国美延山信州下伊那郡大鹿村地獄谷、1949 年。

キバナコウリンカ *Senecio furusei* Kitam. キク科、武蔵双子山、1949 年。

キミノサルトリイバラ *Smilax china* L. form. *xanthocarpa* Sugim. ユリ科、対馬御岳、1967 年。

キゲタンポポ *Taraxacum luteopapposum* H. Koidz. キク科、相模国西秦野村、1935 年。

ヤシュウハナゼキシヨウ *Tofieldia nuda* Maxim. var. *furusei* Hiyama ユリ科、下野大谷、1949 年。

ナルカミスミレ *Viola eizanensis* (Makino) Makino var. *simplicifolia* Makino form. *leucantha* Hiyama スミレ科、上野鳴神山谷、1952 年。

これらのうち、カイサカネランは中国の陳博士と共同研究し、古瀬氏自らが記載している。また、長野県植物誌の中の第Ⅱ編第 1 章「人物を中心とした研究史」(丸山 1997)によると、上記以外では、シロアキグミ *Elaeagnus umbellata* Thunb. f. *argyrea* Araki (長野県下伊那郡浪合 1932 年、原記載は下伊那郡豊村) やヒロバネアサノハカエデ *Acer argutum* Maxim. f. *latialatum* Sugim. (長野県下伊那郡大鹿) などが古瀬氏によって発見された分類群であるとしている。

古瀬氏は広く全国を歩き植物を採集していたが、それだけでなく植物分類に関連する多くの文献を所持し勉強していた。その豊富な知見に基づき、昭和

33 年 (1958) ごろに出版された地方や地域の植物誌に対して、リストの漏れや情報の誤り、またリストを作る際の標本や文献の引用方法などを指摘することがあった。それは自身が「悪舌暴言」と呼ぶほど時に厳しいもので、県内のものでは藤沢正平著・水島正美校閲「志賀高原の植物」(1958) や小泉秀雄原著・横内斎増改補「日本南アルプス寒地植物誌」(1959) が対象となった。彼がそうした指摘の初めに述べていたのは、「植物誌や目録の作成とか発表には少なくとも自己を忘れ多くの同好の協力を求め、その時の最大の (効果ある) 完成に努力することが私共採集家の良心ではないかと思う」であった。現在、長野県植物誌の改訂版の作成が進められているが、古瀬氏の言葉を心にとどめ、彼の批判に耐えられるものを目指したいと思う。

本稿を書くにあたり、以下の文献と本稿末の「古瀬義氏 業績」の文献を参考にした。

大場秀章編 (2007) 植物文化人物事典 - 江戸時代から近現代・植物に魅せられた人々、日本アソシエーツ株式会社

大場秀章 (2016) プラント・ハンター、日本植物学会編、植物学の百科事典: 18-19. 丸善出版株式会社

勝山輝男・高橋秀男 (1997) 資料紹介 古瀬コレクション～古瀬義氏採集植物標本～、自然科学のとびら, 3(4): 32. 神奈川県立生命の星・地球博物館

小泉秀雄原著・横内斎増改補 (1959) 日本南アルプス寒地植物誌、横内斎

田中徳久 (2009) 古瀬義氏 植物標本コレクション、自然科学のとびら, 15(4): 31-32. 神奈川県立生命の星・地球博物館

田中徳久・勝山輝男・大西亘・木場英久 (2014) 古瀬義氏採集の植物コレクションに含まれる基準標本、神奈川県立生命の星・地球博物館研究報告 (自然科学), 43: 33-62

初島住彦 (1996) 追悼文 古瀬義氏の死を悼む、植物地理・分類研究, 44(1-2): 97

藤沢正平 (1958) 志賀高原の植物、志賀高原研究会

丸山利雄 (1997) 第Ⅱ編 植物研究史 第 1 章 人物を中心とした研究史、清水建美監修、長野県植物誌: 53-92. 信濃毎日新聞社

次に生前の古瀬氏との親交があった、神奈川県立生命の星・地球博物館の元学芸部長の勝山輝男氏と、

同博物館の現学芸部長で古瀬標本を調べられている田中徳久氏からの寄稿を掲載する。

古瀬 義さんの思い出

神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員
勝山 輝男

神奈川県立生命の星・地球博物館では 1969 年から 1992 年頃まで、古瀬さんの標本を 1 年に 100 ～ 500 点ずつ、断続的に購入していた。1989 年 5 月、神奈川県立博物館の学芸員になって最初の資料収集の仕事として、当時学芸部長だった高橋秀男先生といっしょに、お宅を訪問したのが古瀬さんとの出会いであった。古瀬さんは 1996 年に 84 才で亡くなられたので、本当に短いお付き合いであった。

古瀬さんのお宅へは数回、標本の購入でお邪魔した。野帳や日記に記された採集記録からラベルを作成され、それができると標本を取りに来るように電話がかかってきた。採集者が自分でラベルを書かないと、標本の価値は半減すると言われ、ラベル作成は必ず自分の手で行っていた。そのため、ラベル作りに時間がかかり、年に 100 ～ 500 枚程度しか買うことができなかった。標本は 1 枚 400 円で購入していたので、たいした収入にはならなかったと思う。1 枚 600 円に値上げしようかと話をしたところ、標本の価格は 400 円以上は望まないと言われた。早朝に高橋先生の車で横浜を発ち、午前 10 時頃には古瀬さん宅に着いていた。いつも午前中はお茶を飲みながら、植物の分類や採集の話を長々と聞かなければならない。ひとしきり植物の話をしたのち昼飯をごちそうになり、標本購入の商談は午後になってからだった。

古瀬さんはフィールドで多くの植物を見てくれたので、その話は若い研究者にとって参考になることが多かった。標本を作製された植物の産地はよく憶えておられたので、調査したい植物の情報をお聞きすることもあった。当時、私はスゲ属植物の写真図鑑を企画していたので、センジョウスゲの産地情報をお聞きした。古瀬さんは伊那谷出身で、南アルプスにはよく登られていた。センジョウスゲは南アルプスの仙丈ヶ岳周辺の亜高山帯針葉樹林内に生えるスゲ属植物で、分布が限られていることと、針葉樹林内のコケの中に孤立して生えているため、きわめて発見しにくい植物である。2 万 5 千分の 1 地形図に産地を記入していただき、見つけにくい植物なので丹念に探すことをアドバイスされた。1992

年の夏に首尾よく写真撮影することができた。そのことを古瀬さんに報告すると大変喜ばれた。

古瀬さんの標本は十分な量が 1 枚の新聞に挟まれており、小型の植物の場合は多数の個体が挟まれていた。それらは 1 枚の台紙に貼るように言われた。標本は丁寧に扱っても利用すれば、少しずつ消耗するので、十分な量が必要であると考えられていた。また、珍しい植物がもてはやされるが、普通種も大事だと言われていた。論文に証拠となる標本がきちんと引用されることを望み、古瀬さんが採集された標本が利用されて新分類群が発表されることをとても喜んでいた。

古瀬さんをご自分で論文を書かれることはなかったが、カイサカネラン *Archineottia japonica* Furuse in Acta Phytota. Sin. 26: 69, f. 1 (1988) の命名者には古瀬さんの名前が残されている。晩年は中国科学院植物研究所 (PE) に多くの標本を収められていたが、共著でカイサカネランの記載論文を発表できたことが影響していたと思われる。1998 年に PE の標本庫を訪ねた際に、標本庫の一角に「古瀬標本室」の看板が掛けられているのを見た。

神奈川県立生命の星・地球博物館 所蔵の古瀬義氏の採集標本

神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸部長
田中 徳久

古瀬義氏は、15 万点を超える植物標本を採集し、その標本は、イギリスのキュー植物園やスウェーデンの国立自然史博物館などの海外の標本庫にも送られ、貴重な資料となっている。その標本は、非常に丁寧に作られ、生育環境まで記されたラベルが貼付されるなど、高い評価を得ている。生命の星・地球博物館は、そんな古瀬氏が採集した標本 25,361 点を所蔵している（収蔵資料管理システムに登録済分のみ；以下「館の古瀬標本」と表す）。館の古瀬標本は、前身の神奈川県立博物館時代の 1969 年より少しずつ購入させていただいたものや、古瀬氏の逝去後、ご遺族から寄贈されたものが大部分であるが、歴代の学芸員が古瀬氏本人から研究用に提供されたものもある。

その採集地を都道府県別にみると、沖縄県の 4,732 点、北海道 3,155 点、栃木県 3,045 点に続き、長野県で採集された標本が 2,412 点ある。古瀬氏が晩年を過ごされた栃木県を除くと、全国で積極的に採集活動をした標本点数としては、3 番目の多さ

である（続く鹿児島県は 2,278 点、山梨県は 1,158 点）。それぞれ日本の北端・南端に位置し、特徴ある植物相を有する北海道と沖縄県に次ぎ、集中して採集したのが長野県であるといえるだろう。その豊かな植物相と優れた景観が、古瀬氏を強く惹きつけたのであろうか。なお、館の古瀬標本のうち、長野県で採集された標本は、1,135 分類群のもので、この数は、栃木県、沖縄県に継ぐ数で、科別では、キク科、イネ科、カヤツリグサ科の植物がそれぞれ 90 分類群以上ある。

また、生命の星・地球博物館の所蔵標本のうち、古瀬標本にしかない植物は 300 種以上あるが、長野県で採集されたものには、エンビセンノウ *Lychnis wilfordii* (Regel) Maxim. やモイワナズナ *Draba sachalinensis* Trautv.、キソイチゴ *Rubus kisoensis* Nakai、シナノアキギリ *Salvia koyamae* Makino、ツキヌキソウ *Triosteum sinuatum* Maxim など 15 種ほどがある。これらのうち、エンビセンノウやモイワナズナは北海道にも分布するが、館の所蔵標本は長野県で採集された標本だけである。長野県のモイワナズナは、大井（1949）により、“Iwahana, Shiojirimura in Chiisagatagun” で採集された標本を基準標本に、カブダチナズナ *Draba shinano-montana* Ohwi として記載されたものであるが、古瀬標本のモイワナズナは、小県郡塩尻村岩鼻と小県郡泉田村半過で同日に採集されたもので、前者は基準産地で採集されたものであろう。

また、館の古瀬標本には、いくつかのタイプ標本が含まれるが、ホロタイプは 1 点のみである。その 1 点はアカイシリンドウ（写真 2）で、基準産地は長野県である。他に長野県を基準産地とするものでは、トダイゴヨウマツのアイソタイプを所蔵するが、そのホロタイプは確認されておらず（田中ほか 2014）、貴重な資料であるといえる。

以上、生命の星・地球博物館の古瀬標本について、概要を紹介したが、私が古瀬標本を初めて意識したのは、キュー植物園の標本庫で見出したシラスゲの標本であった。その後、当館にその重複標本が所蔵されていることが分かり、各地で古瀬標本を調査す

るきっかけとなった。しかし、私自身は古瀬氏ご自身にお会いしたことはない。機会はあったのだが、その標本にこれほど深く関わることになるとは予想もせず、その機会を生かさなかったことを今も後悔している。

引用文献

- 大井次三郎（1949）東亜植物への寄與．国立科学博物館研究報告，26: 1-12
田中徳久・勝山輝男・大西 亘・木場英久（2014）古瀬 義氏採集の植物コレクションに含まれる基準標本．神奈川県立生命の星・地球博物館研究報告（自然科学），43: 33-62

古瀬 義 氏 業績

「野草」（野外植物研究会）

- 1959 近頃出された植物誌（目録）についての私の愚かな見方（1），25(7): 3-5
1959 近頃出された植物誌（目録）についての私の愚かな見方（2），25(8): 4-8
1959 近頃出された植物誌（目録）についての私の見方，25(9): 3-6
1960 風越山人彷徨記（1），26(1): 5-6
1960 風越山人彷徨記（2），26(3): 5-7
1960 風越山人彷徨記（3），26(12): 3-5
1961 近頃出された植物誌（目録）についての私の見方，260: 24-28

「植物採集ニュース」（奥山春季監修）

- 1963 東京近傍採集地の紹介（Ⅰ）信州上田近郊角間の谷，9: 38
1963 東京近傍採集地の紹介（Ⅱ）信州南軽井沢の湿地，10: 38
1964 東京近傍採集地の紹介（Ⅲ）信州上田市西上田駅附近鼠宿，15: 18
1966 東京近傍採集地の紹介（Ⅳ）信州南佐久郡川上村梓山，26: 20